



和歌七部之抄

百人一首 上

特別
イ 4
3163
88(4)





小倉山庄色紙和歌抄上

全五巻

室舒明后

全拾三

秋の世を流布れ抄ありと云々を云たり多し
母の天をくは附りて天下深固れ云々
ハ板をとりて竹と板と一葉れ巻とて外巻也

天智天皇

天智天皇
天智天皇
天智天皇

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

秋田乃かり月夜露の海と河と秋衣と云々
易月と云々
易月と云々
易月と云々

也げ歌新古しとれ暮乃春歌よ入り交なれ歌
れあくわけの事や心の中よこめく河に
るくくを侍一急我流中よげ歌を
くくく定家卿。○大井のうらぬ井とさ
とのまはく暮暮よまうくと衣流とげ歌
い井とれよく流流と衣とくうこまうくま
不得とて

柳む人磨

云多し内い人磨
柳まわりの五よは
と流るうとく

長き幸二歌
人た今う方は秋
空をりよるは
中るは流るうと
あえりう

是門の山鳥尾の志らるるのまうく一衣と推し移ん
げ歌よ果たあ流るうくはくあかしく新

雲のち折れらうらうら山鳥の尾の志らるる尾志や
とひくもくく一衣ととて流る女作の流も
くうらわうく乗乃まうく詞わうくさ妙舟一
風情を長もくく一歌歌とい服よはまうく
るん吟一して其味ととく侍るく一ヤ
心移れ歌よやゆらん磨れ舞もくくと世と
一く流るくくも急流との流くくさふは
と天をれ歌流の流と古とれるよ独歩と
とくげ理よや

山邊氏之是ハ聖武ハハ時代ハ人又
ハ九月日ト云ハクテハ流るえん
人ト云ハハ天平ハ
山邊氏人
くく人と云

今とく船は行らひゆく此の秋よりてあし
さしくは秋を世られ秋くあしづ人よかきうへ
そは進ん余情うきりまこまやゆりんは寄
と作はまれば先葉の候より侍をん月やあめ
御の歌よこそといひ進けりこそ

中細言家持 大伴宿禰
大田原親光

終のこゝを家持よとく寂れはみだりなまきり
けかこゝこの橋れ交七くはよつこ義よはね遠く
よやの屋より交いこゝのりこゝのあつた事
まけく船舟屋とくをえ海より人の所と

あさくるはるなまこゝ進んかき海より
とけ歌れなまきぬくあつ月とあつたも
晴くろあまの天よみらくゆりまこゝ多源
あまよまはさ出くけ歌とあつて感法を
うさう有くくくくその歌の鶴のうきを家持
の親れらとあまきぬえんよと家とゆりま
な

安部仲磨 丹守

天の宗ゆりけりまきり春のあつた月と
是の伴のと唐の物あつてはつたはれ

あつと書かす所流とくなく
きつる月後よそく海より光

小野寺

小野寺好く
此明末を以て

後成寺殿伊航云小野良実の女

五身方の秋
とてふる
をたつる勢

死の色に流るよそく
まいつらう花はく
まふとこひひあつるよそく
あつと書かす所流とくなく

長ぬゆりのめはく
下れらる花の色
乃かろく河と強り
人よあひさく
と海より物
あつと書かす所流
あつと書かす所流
あつと書かす所流

輝丸 相海に輝丸くまら

此明てはれ時分の人の一候道九者之也
と候るも一候といふも道九者一也
是よりして世人病ははり一也
毎に他人に

是候に於ても一候も別つてあるも一候も
け敷の度書し相海に冥し度室と作
つて候ゆきも一候も人として候者
是や一候といふ道九の國は度つて又文字
面は藤室は相海に海の義明と下の也と

會者定離れく一候も一候も流轉の也
圓と一候と候ゆきも一候も一候も
候も候ゆきも一候も流轉の也
候も候ゆきも一候も流轉の也
候も候ゆきも一候も流轉の也
候も候ゆきも一候も流轉の也

桑後給と桑後給と桑後給と

候候て候と一候も一候も一候も
候候て候と一候も一候も一候も
候候て候と一候も一候も一候も
候候て候と一候も一候も一候も
候候て候と一候も一候も一候も
候候て候と一候も一候も一候も

中身も幸し
舞いも幸し

の舞姫と天し女は横をり九約ありひま
さ物也適眼れ歌也い創るる風希ふ海
を仍定家つものよるるくくそあしむ
は舞姫よんどうは女は約し切是入道殿
伊統 天長 信見原は天 芳野山をて現くとい
きし時あ神よりをいあひひて其年
として節女入るり曲と舞りしとてあとり
うり近代大掌合れ時有也くくは言さ且
寅言ありり日年月念よと海しきるる
霜月五日行つる天子大掌言
公言事始け其言

湯殿院

法和のゆき

色林のゆき

流波振れ家よりあつる系の川意を極りて流るる
心は川の舟のひきし。みゆきさりとて
水の流るるは流るるて劇とる風はあつる
く想と序歌く奇の心は是ましくこはて君
の心歌もくありしうさあ侍く天子は
心もさかのまもありしうさあ侍く天子は
平の徳とあり思るる下り慈とあはれ
大くこの人よふはあつるしうさあ侍く
云流に始盤觸入我則吾座

中身も幸し

舞いも幸し

云よ及々とお源がーてーの河ーのさるる
と夜と徳吟味とくさるる

素性法師 盛服子去歌利三
依時

とらんやーの斗おる月の河の河月と待お海
宵明の月と待おる一 夜れあそあーと
きよのさく月とと返る行の河一と
乃重のあ所とと行ひく河らうと
新く定家への河あ一 夜れまー河と
侍らあ

文屋康秀 維新歌之官勅令
或所 徳政子

吹くは好草あまのさるる河と河と河と
は歌をさるる河と河と河と河と河と
さるる河と河と河と河と河と河と
又それ河と河と河と河と河と河と
河と河と河と河と河と河と河と
さるる河と河と河と河と河と河と

大い子屋 音信音子白家
あしとさる

月よとらへは物とあれれ我の秋の河と
大い子屋 音信音子白家
河と河と河と河と河と河と河と
河と河と河と河と河と河と河と

いそぎに— 宇統とそうらうの— 後身一のや
よあかゆふをとりんとて一人の終り
ゆ— 終り— ちん

菅家

いなる麻も五河とよ山抱のあり— 終りのまじく
是を宇多所門の— 折敷れ時ゆ— ちん
折敷れゆけしひ 蕪れ字— 終り— ちん
う— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
麻も五河とよ— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—

いそぎに— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—

ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—

三曹— 初修寺をちん

いそぎに— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—
ちん— ちん— ちん— ちん— ちん— ちん—

うりまもみはくろくは教の羽流りくし
 更なる由りゆくゆく一神乃教たる由新物
 撰るるは山風神の奇ありく入侍りゆく
 変とありゆくし一は神の内言子女
 事一はゆくゆく名ありありて通切しと
 神ろくちあ方とくくく新くて文字信
 得る信く

貞信云
名実忠平 隆平
十一文字を以て

尖峯山事此抱象を何くとしその御音もする人
 是と亭子院大井門は法寺有りく何のそ

有なることと作をなすすまは乃り
 妻人として此教と後り色は此書は
 事と秘身よりくし一は抱し作とする
 して心をまよや奇のなぬ凡俗とするはて
 りありくは西梅名院変法統云御音も信
 洞も故彦ひて信とし

中興言道補

名実忠平 隆平

今のうりまもみはくろくは教の羽流りくし
 わさてるゆくゆくは泉河の源はなる泉河の
 事一はゆくゆくは名実忠平の源はなる泉河の

うさぎのうたのふたつは絶景くありしなる
よありとせむしは海と恋はく我のよさ
てくるく又一向わひは深まらむ人と年
月とてくちみしてきりりやあやまる
てと歌のふ海類あつるるけり仍え入道則
ゆらゆらとく我のよさくはるくはるく
ゆらゆらとく人となりくはるくはるく

源家平朝臣 天長元年乙丑

先考の孫惟忠の子と王孫との名源氏と名せし

心づくるを憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ

け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ
け歌ハ秋は憐れむさすめたりとく人かや草と花のよさ

九河国清姫 元禄元年
新井氏源氏利子

公ありて廿一のうたやあはれ物ありとく人かや草と花のよさ

坊上是剛

五言四句

朝あさのこもゆる明あきられ月つきとよみよき徳とくはははらむ人のま
け歌うたさば里さとの時ときれ物ものはせ侍さむらいる人ひとも
里さとよゆき波なみは白しろきしほさきよき言ことにゆるし
者もの明あきらる月つきとよみよき言ことにゆるし
歌うたさば里さとの時ときれ物ものはせ侍さむらいる人ひとも

春道別村

五言四句

春はる道ちみち別わかれ村むらは
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
歌うたの志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり

春道別村
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
歌うたの志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
歌うたの志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり
歌うたの志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり

記支剛

五言四句

記支剛
風かぜのりまをふる志こころかゝりまをふるあはれ抱かかえり

んを華れしこもるぬしむまゝして春の
丹砂よくと照して久方のやうに處し
らう鳥れ色ま草のまゝのまゝあふ此敵と
似くまのいさくたれ散らんまのよめ也
け歌くくまはくさくして作流侍

有原豊風 系法道子後
居於此

世よりあう人もん言所のたひひしああゝあゝ
いよ通し年老く後たうらまぬくはあゝ
んとあういせさうくすれと有あうとえ
まゝくまゝぬまゝくはあゝ只陸朋友あゝ

あうしなうし時高砂れまゝくはあゝ年たゝ
物されことあういけれも骨れあうし孫を打
歌く世よりも知人もんとまゝく下のをま世
のまの養うはあゝ強りまゝとゆゝ人ま
ねああ対のいあゝまゝのまゝくはあゝ
しなれくはあゝ神統千年あゝまゝく
ねいああ草のまゝくはあゝまゝくはあゝ
なとく成くはあゝまゝくはあゝまゝくはあゝ
あまゝくはあゝまゝくはあゝまゝくはあゝ

紀書之 文神二男

三十三

今更なる志はなほ花をじし世に白く
 夏書は初秋はまきしけりてに座しけり
 家久あふ座しけりて寝て寝よる
 是は家は日わかゆらふあはれ
 あふとてわし侍りまはれし
 梅花とわけて後けりかくゆらふ
 と久あふ喜にねいふ
 りとあふ人といふは
 明く貫之乃歌に余情をわらふ歌は
 多し座しけりて

清原原春文
 清原原春文

昔は花をじし世に白く
 是は家は日わかゆらふあはれ
 後けりかくゆらふ
 と久あふ喜にねいふ
 りとあふ人といふは
 明く貫之乃歌に余情をわらふ歌は
 多し座しけりて

大屋朝康
 大屋朝康

白鳥は風の吹く雄たけ
 白鳥は風の吹く雄たけ

りしむるもよらるゝ記念日神をまつ
る守れんくうらとん中りく眼をくして驚く
—と歌ふ

中納言教忠 四年三月

建し海のふらふらにけしむ物もあらま
くよまゝあひぬむらあひあつてり一
れららららららららららららららら
と建しぬらあひぬむらあひあつてり
まららららららららららららららら
のくまゝあひぬむらあひあつてり

おんくわあつてりあつてりあつてり
あつてりあつてりあつてりあつてり
あつてりあつてりあつてりあつてり
あつてりあつてりあつてりあつてり
あつてりあつてりあつてりあつてり

中納言朝忠 三年三月

建し海のふらふらにけしむ物もあらま
くよまゝあひぬむらあひあつてり一
れららららららららららららららら
と建しぬらあひぬむらあひあつてり
まららららららららららららららら
のくまゝあひぬむらあひあつてり

駁くはしる御らんくわのいひのわたりは
お入しはてしきりの中りしやの御也
左人の教とわきりしは御とくは御の御侍
あり又御しき御らんくわとくわくしき
夏と取流さるはしきとくわく侍とくわく
教とくわくしきとくわくしき侍とくわく
とくわくしきとくわくしき

九条右大臣御牌云二男
一條右大臣御牌云二男
謙徳云

謙徳云の御是之淡海云よりとくわくしき
御号の云と御徳云よりとくわくしき也

唐令此御書取大臣辞退とて天禄三十二
二年九歳

御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男

御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男
御書取大臣御牌云二男

源重之 法和天皇御子也

孝行伝記

心懸け去来とてしつゝ一可百首と後
ていふことあり

風よよ若くは海の波のたつたては思はれんか
えらういふぬいふふ人の心をたつたてし
けふよの流よ波のたつたてしつゝ
秋の侍れと乞ふ心はたつたてしつゝ
白

大寺長徳道 徳徳の道

みよららほしむる人の心をたつたてしつゝ

備上といふ所のあつたてしつゝ
入敷の是も席敷の心をつたへしつゝ
体も家も心の胸もつたへしつゝ
あつたてしつゝあつたてしつゝ
けふの思はれもつたへしつゝ
あつたてしつゝあつたてしつゝ
くちの心もつたへしつゝ
あつたてしつゝあつたてしつゝ

源重之 法和天皇御子也

居らるるあつたてしつゝあつたてしつゝ



